

〈総論〉

絶滅危惧種 アホウドリの保全

出口 智広 *Tomohiro Deguchi*

公益財団法人 山階鳥類研究所 保全研究室 室長



アホウドリは、かつて伊豆諸島鳥島や小笠原諸島、大東諸島、尖閣諸島、台湾周辺の島嶼などで大集団をつくり繁殖していた。明治中期以降、海外で需要が高まっていた羽毛を採取するために乱獲され、1949年には絶滅したと報じられたが、1951年に鳥島で約10羽の生存が確認され、再発見された。

これ以降、日本は、1954年に鳥島全域(453 ha)を国指定鳥獣保護区に、1958年にはアホウドリを国の天然記念物に指定し、1962年には特別天然記念物に格上げした。さらに、1965年には、鳥島全体をアホウドリの繁殖地として天然記念物(天然保護区域)に指定し、1972年には「特殊鳥類の譲渡等の規制に関する法律」の対象種に指定した。現在は「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律(種の保存法)」の対象となり、保護増殖事業計画に基づいて営巣地の保全管理がなされている。

これまで、鳥島ではアホウドリの積極的な保全活動がおこなわれてきた。1950年代から60年代半ばには、ヒナを捕食するおそれのある野生化したネコの駆除や営巣地の整備が気象庁鳥島気象観

測所の職員によっておこなわれ、1980年代からは、東邦大学の長谷川博氏により、営巣地保全管理のための砂防・植栽工事が継続されてきた¹⁾。その結果、アホウドリの繁殖成功率は約70%に維持されるようになった。さらに、鳥島の燕崎にある従来営巣地は急斜面にあり地滑りで崩壊しやすいため、北西斜面のなだらかで安定した場所にデコイと音声再生で誘致し、新しい営巣地を形成する事業が環境省と山階鳥類研究所によって1992年から始められた²⁾。また、水産庁は鳥島の距岸20海里的海域を特定水域に指定し、この



伊豆鳥島を飛ぶアホウドリ

(佐藤文男氏 撮影)

【関連する領域】

組織：北海道大学(水産学部、総合博物館)、環境省省野生生物課、水産庁生態系保全室、東京都環境局、アメリカ魚類野生生物局、アメリカ海洋大気庁、オレゴン州立大学
業界：保全生物学、生態学、行動学、水産学、遺伝学

学 科：生物
学 問：生物学、水産学、動物学、環境学、気象学、海洋学
情報源：山階鳥類研究所HP、環境省 アホウドリ ウェブサイト、U.S. Fish & Wildlife Service ECOS Short-tailed albatross ウェブサイト

海域で操業する漁船に対して、アホウドリの混獲軽減措置の実施を求めてきた³⁾。これらの包括的なアプローチにより、鳥島では繁殖個体数が年率7%以上の速度で増加し、2017年時点で番い数約800組、総個体数約4600羽まで回復した。

このようにアホウドリは順調な回復を遂げてきたが、個体数の増加にともない新たな問題も発生した。渡り鳥であるアホウドリは、非繁殖期の夏から秋にアリューシャン列島周辺やベーリング海を訪れるのだが、同海域で盛んにおこなわれる底延縄漁業の際に、アホウドリが混獲死亡するという報告が1995年から目立つようになったのである(図1)。この状況を受け、アメリカ政府は同様の事故が今後も十分に起こりうるという判断から、2000年にアホウドリをアメリカの絶滅危惧種に指定した。それ以降、アホウドリは国際的な協力の下で保全活動が進められるようになり、日本側は繁殖地での取り組み、アメリカ側は非繁殖期の採餌海域での取り組みを主な役割分担とし、定期的に開かれる会議の場で双方の進捗状況が報告されるようになった。

国際協力の経緯や日本側の取り組みについては、昨年発刊された本誌Vol.71 No.4の中で詳しく解説した⁴⁾。そこで本特集では、アメリカ側の担当者であるオレゴン州立大学のRobert M. Suryan氏とアメリカ魚類野生生物局のKathy J. Kuletz氏に、アラスカ海域におけるアホウドリの分布特性について、他種と比較しながら詳しく解説いただいた(II-①参照)。同海域での混獲軽減措置が功を奏していることは、アホウドリの回復に欠かせない要素であり、地球温暖化にともなって分布が北寄りにシフトしている状況は非常に興味深い。次に、北海道大学水産学部の綿貫豊氏には、アホウドリ科全体が海域で遭遇する問題に対して、最新の装着機器を用いて解決策を探る研究手法について、多方面から詳しく解説いただいた(II-②参照)。今後は、鳥に装着した機器から得られたリアルタイムな情報が、保全計画の策定に不可欠となっていくに違いない。そして最後に、北海道

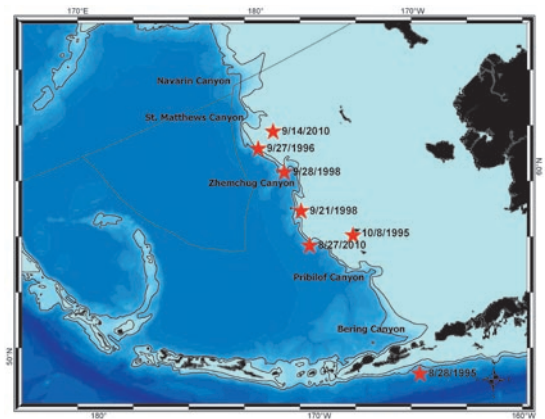


図1 1995～2010年にアラスカ海域でアホウドリの混獲事故が発生した位置

(R. M. Suryan氏の作成)

大学総合博物館の江田真毅氏には、アホウドリに含まれる二つの異なる系統と、系統別の保全対策の必要性について詳しく解説いただいた(II-③参照)。この部分は未着手なまま残されてきた難しい課題だが、ここを解決してようやく、アホウドリの保全は完結したといえるだろう。これらの筆者には厚くお礼を申し上げる。本特集を機に、アホウドリの保全に関するより深い理解が多くの人の中で共有され、保護増殖事業および学術研究がさらなる飛躍を遂げることを願う。

〔文献〕

- 1) 長谷川博, 生物の科学 遺伝 **53**, 86-89 (1999).
- 2) 佐藤文男, 百瀬邦和, 鶴見みや古, 平岡孝, 三田村あまね・ほか, 山階鳥類研究所報告 **30**, 1-21 (1998).
- 3) 清田雅史, 南浩史, 山階鳥類研究所報告 **40**, 1-12 (2008).
- 4) 出口智広, 生物の科学 遺伝 **71**, 4, 376-381 (2017).



出口 智広 Tomohiro Deguchi

公益財団法人 山階鳥類研究所 保全研究室 室長

2004年, 北海道大学大学院農学研究科博士課程修了。博士(農学)。2005年, 公益財団法人山階鳥類研究所入所。専門分野は, 行動生態学, 海洋生態学。

海洋環境変動と海鳥の採餌繁殖生態の関係について研究してきたが, 鳥類の栄養状態, ストレス応答など生理学的テーマにも関心があり, 入所後はアホウドリ回復チームのメンバーとして, 小笠原への移住計画を担当。主な著書は, 日本の希少鳥類を守る。(分担執筆, 京都大学学術出版会, 2009), 鳥類学。(共訳, 新樹社, 2009), 鳥の絶滅危惧種図鑑。(共訳, 緑書房, 2013)。